

千代台公園テニスコート増設について

1 大会開催の可能性

現在の10面が16面あるいは20面になると、全道・全国規模の大会開催の可能性が大いにある。

別紙にもあるが、例として「北海道都市対抗テニス選手権大会」は、札幌、旭川、帯広、そして来年度整備されオムニ20面となる苫小牧で、持ち回りのかたちで開催している。函館も増設されれば、その候補に挙がることになる。また高校生の新人戦に当たる、「高等学校秋季テニス大会」も、旭川、帯広、苫小牧で回しており、他の開催地を模索する高体連としても、函館のコート増設は強く望むところである。

3, 4年に1度の頻度で全国大会が北海道で行われている「全国実業団テニス大会」についても、函館は観光地として魅力ある場所であることから、誘致の可能性は大きい。

2 合宿誘致の可能性

3月中からテニスができる函館の希少性をアピールすべき。

合宿誘致により経済効果を求めたり、スポーツ都市のイメージを得ようとする試みは各市町村で行われており、道南の北斗市、八雲町、七飯町などの実践はよく耳にするが、函館の取り組みはどのようなのか。テニスに限ったことではないが、現状のように4月1日からテニスができる地域は北海道では数少ない。道内の高校などは、春休み中の函館合宿を検討するところが多く、市内校に打診があるのだが、4月1日からしかオープンしないことや、限られた面数がすぐに予約でいっぱいになるため、断念している現状がある。増設があり、オープンも早まるようなことがあれば、やはり4月初旬は雪に覆われる青森等東北勢の誘致も考えられる。本州で合宿を実施することが多い道内の大学テニス部にも魅力的な場所となるだろう。

3 合宿・大会による経済効果

高体連の開催地の夜の繁華街は、校名を背中にプリントしたウインドブレーカーを着た若者たちであふれかえる。

合宿については2泊から3泊以上の宿泊が見込まれる。大会についても、それに近い宿泊日数であるし、1で例に出した「都市対抗大会」は参加数が約400、同じく「高体連」は500以上の選手団が函館に滞在することとなる。社会人の大会では、ほとんど「懇親会」的なものが催され、言うまでもないことだが社会人のスポーツに対する認識は学生のそれに比してレジャー感覚が大きく、飲食についての経済効果はとても大きい。

4 現状での大会開催の難しさ

ほぼ全ての日曜日に大会が開催されているため、一般市民のニーズが満たされていない。高校生が授業を受けられない。

函館にはテニス協会、ソフトテニス連盟があり、それぞれがジュニア、中学生、高校生、一般、シニアの大会を運営しており、そのほとんどが千代台コートで行われている。そのため、それぞれの協会、連盟で譲り合ってコートを使用しているのだが、ほぼ全ての日曜日が埋まっているかたちである。大会数をもっと増やしてほしいという会員からの要請がある反面、文化スポーツ振興財団の担当者からは、一般市民が休日にテニスを楽しめるようにこれ以上大会を増やさないでほしいということばもある。面数が増えれば、市内大会なら10面程度で開催し、残りを一般市民のために確保できると思われる。現在、高校生の大会は、日曜日に空きがないことから平日開催を余儀なくされており、そのためテニス部所属の高校生が授業を公欠せざるを得ない弊害も発生している。

5 他地域のコート面数との比較

函館のような規模の都市で、10面という数は少ないことが歴然。

現在函館市の有するテニスコートは、千代台10面、日吉5面、昭和2面、その他青柳、銭亀などを含めても20面。日吉は土（クレイ）のコートで、現在主流のオムニコートではないことから敬遠されがちであり、5面では前述のような全道規模の大会は開けない。平成22年度の道内他都市のコート数のデータを抜粋する。

札幌 野幌（江別市・道立）18面、モエレ沼 15面、平岸 計画中（15面）、稲積公園 20面、円山 12面、屯田 8面 など合計298面

旭川 花咲 18面、忠和 20面 など合計97面

苫小牧 緑丘 20面 合計41面 帯広 帯広の森 20面 合計41面

北見 東陵公園 16面 合計41面 網走 呼人 16面 合計22面

釧路 市民コート16面 柳町 8面 合計 52面

6 平成21年度高体連全道大会 当番校函館中部高校 開催地 苫小牧市

悪しき前例を作った函館市のコート事情。屈辱的な歴史。

高体連の全道大会は各支部のローテーションでその当番校を決めている。過去に白百合がグリーンピア大沼開催で、函館東高が大沼プリンスホテル開催で当番校を務めた。21年3度目の当番校が函館支部に回ってきた際、グリーンピア、大沼プリンスがテニスコートを縮小していたことや、高校生のテニス人口が増え大会規模が拡大したこともあり、この2施設では開催不可能、千代台でも無理であるという事態が発生した。道高体連専門部、函館支部専門部、当番学校等が解決策を模索した結果、当番校が函館にありながら、開催は苫小牧という屈辱的な歴史を作るに至った。各支部が本来の校務の時間を縫って、多数の犠牲を払いながら全道大会当番校を務める中で、函館支部だけが常に他地区の好意に甘えているかたちとなっている。

7 文化・スポーツともに先進的地域であった函館

陸の孤島とも言うべき後進的地域への陥落。

他の文化・スポーツと同様に、函館はテニスでも北海道内で先進的な地域となり、他都市をリードしてきた歴史がある。明治41年にソフトテニス、大正11年には硬式テニスが函館で行われている記録があり、その後もそれらの活動には誇るべきものがある。先んじて開けた都市が、そのことにあぐらをかき、他都市の発展を見ないことにより、いつの間にか旧態依然の恥を感じない状態に陥ることは、この歴史ある函館の市民として避けたいことである。

8 飽和状態にあるコート状況

にもかかわらず好成績を上げる函館勢。飽和状態から来る？矛盾したシステム。

上記「4」でも挙げたとおり、函館のコート状況は厳しく、特に夕方以降の時間帯は、なかなか予約できない状況にある。各学校のコートの状態もよくなく、夕方は学生で溢れている状況にあるが、彼らにとってもその人数から十分な練習になっているとはいえない。そんな悪条件にありながら、函館勢は健闘している。昨年度については小学校、中学校、高校の北海道チャンピオンが函館の生徒であった。また全日本ベテランテニス大会、65歳以上シングルス部門では舟田氏が一昨年優勝、今年は準優勝と、函館の名を全国に轟かせている。コート状況の改善によってさらなる飛躍が見込まれるものである。

コートレンタルに関わって矛盾の感を禁じ得ないシステムがあるのをご存じだろうか？例えば、高体連の大会で3日間の使用予約をする。2日間は正規の大会日程で、3日目は雨天などによる日程延長の場合の予備日として予約している。晴天に恵まれ大会が順調に進み、予定通り2日間で終わるとする。この場合3日目の使用料金は払い戻されない。そして大会が終了した場合はコートを返還するという規定に従い、高体連参加者が練習にそのコートを使うこともできない。その上、その3日目に一般市民などがレンタルを申し出たとすると、その市民からも料金を徴収して貸し出す。このシステムについては市教委も関わる財団の規定であり、法的根拠のあるものなのだろうが、その背景にはコート確保の過当競争があるからではないだろうか。このため、各団体は常に予備日の分の支出を余儀なくされている現状で、改善を熱望する。

9 スポーツ宣言都市としての函館

生涯スポーツとしてのテニスの存在感。

前述「7」のように、函館は誇り高き街として、その魅力にふさわしい実状を兼ね備えていってほしいと考える。様々なスポーツが市民に親しまれ、健康を志向し、心のバランスを良好に保てるような活気ある都市の姿を思い描くものである。

多種あるスポーツの中には、激しい動きを伴う若者向けのものもあれば、老人も安全に親しむことができる高齢者向けのものもある。その中でテニスは、幼児から高齢者まで親しめるものであり、来年度の全日本ベテランテニス大会では85歳以上シングルスという種目も新設されそうである。

85歳を超える方々が、選手権を奪い合って炎天のなか2時間以上走り回るような競技は、それほど多くないと思われる。そんな生涯スポーツの代表格といえるテニスを蔑ろにするようなことは得策ではないと考える。

今、若きプロ選手の活躍などがあり国内的にもテニスは追い風にある。テニスを経験してみたいという市民が多数現れることが予想される。しかし、コート不足という窮状。そういった方たちがテニスを体験する方途が見つけづらい状況である。北海道各都市のテニス協会には、一般市民が加盟すればいつでもテニスを楽しめるという協会管理の公営コートがある。ところが、函館テニス協会、ソフトテニス連盟にはない。これら市の体育協会に加盟している団体の厳しい現状も回復してほしい。生涯スポーツとしてのテニスに市民が容易に親しめる状況をつくってほしい。